
心豊かに音楽でつながる子どもの育成

小学校 松井 見磨、松本 一菜、石崎 愛惟
中学校 三棟 優子
研究協力者 楠 俊明（愛媛大学）

1 主題設定の理由

心や身体が共鳴するような音楽に触れたとき、そこには感動が生まれる。同じ空間で呼吸を合わせて歌う喜びを味わうこと、仲間と共に空気を揺るがす響きを共有することは、当たり前に行えることだと思っていた。しかし2020年、世界的なコロナ禍でそのような音楽は消えていった。過去と現在の時間軸が分断されたことで、あらゆるコミュニケーションが急速にオンライン化され、音楽もまた、優れた音源や映像技術等と共に変化してきている。

しかし私たちが特に考えたいのは、実際にその場の空気や音、色合いや雰囲気を感じ、自分の目と耳と心で確かに行うことによって身体に染みていく経験なのである。美しい言葉や目前の対話によって心が通じ合うように、本物の生きた音楽との出合いを大切にしたい。音楽の力でつながった心や、そこでの感動は着実に子どもの中に“音の記憶”（『幼年教育研究紀要2010・初等教育研究紀要44号』）として紡がれていくからだ。心を動かす経験を積み重ねることによって“音の記憶”は広がったり深まったりする。そこで必要なのが、美しいものに感動するといった柔らかな感性ではないだろうか。このような柔軟な感性を育てるには、美的情操の育みは欠かせない。

前期研究において、美的情操のよりよい育ちを促すためには、感覚感情だけでなく知的な要素と結び付けた理念形成を行い、子どもたちが“音の記憶”を生かしたり、自らの感性や創造性を発揮したりしながら、自分にとっての価値付けを主体的に行っていく過程が大切であることが確認できた。その学びの過程、すなわち音楽を「そうぞう」している子どもは、音楽科の特質を生かした「見方・考え方」を働かせて、心の動きを伴いながら、音楽によって自分自身の音楽の世界を広げたりつないだりしようとする。そして、心の動きを伴った音楽活動を経験することによって、子どもの“音の記憶”は深く広がっていく。そうした経験を紡いでいくことが、子どもが学校で音楽を学ばなくなる年齢や環境に達したときにも、一人一人が自分の好きな音楽を自ら学習したり楽しんだりすることができるよう、文化としての音楽の理解を深めていくことにつながるのではないだろうか。音楽的感受性や美的情操をも基に、知性と感性の調和のとれた豊かな心や、他人を思いやる優しさ、共感したり価値観の違いを認め合ったりすることのできる温かい心などを育むことが、未来を拓く力の育成につながる考えた。

以上のことを踏まえ、上記の本研究主題を設定した。

2 音楽科における「子どもと創る『深い学び』」

(1) 子どもと共に学びをつなぐ音楽科の授業づくり

ア 音楽科における「深い学び」とは

子どもが新しい音楽と出会ったときには、自分を音楽に開き、前向きに音楽に取り組む姿が大切になってくる。そして、その音楽とつながりたいと思うかどうかを考えるだろう。まず、このつながりたいと思う心を持たせることが、音楽を通じて自分を生かしていくことの鍵となる。音楽をしっかりと受け入れ、新しく自分の中に“音の記憶”として蓄積していくことができれば、その後かかわる音楽や違う価値などに触れたときには、自分の価値と照らし合わせた

り、その価値を膨らませたりするなど、おのずと対話的な学びを促し、主体的な学習活動を通して、深い学びにつながる事が分かってきた。また、知性と感性の往還を伴う学習展開も深い学びを支えることになるだろう。さらに、そのような学習が音楽科での学習だけにとどまらず、他教科等へ生かしたり、子どもの生活や社会で発揮したりできるように、教師が意識していくことが大切である。したがって、音楽科における「深い学び」とは、子どもが「学習材」「他者」「自分自身」とかかわる中で、子どもがそれらとよりよくつながることができるように教師が手立てを講じることが欠かせない。結果として、子どもが心を動かしながら音楽とかかわり、紡がれてきた“音の記憶”を生かし、発揮しようとする姿が表れる学びであると捉え研究を進めていく。

イ 子どもと共に学びをつなぐ音楽科授業

子どもは、多様な音楽体験や音楽経験を通して「どんな音が鳴るのかな?」「どうしてこの曲を聞くとわくわくするの?」といった音や音楽、課題などと出会う。そして、「ささやく音ってどのくらい?」「こんな様子を表してる音かな?」と想像したり、「一緒に弾いてみるどうなるのかな?」「ちょっと、ずらして鳴らしてみよう!」と創造したりしながら追究する。さらに、「そうだったのか!」「もっとやってみたい!」「なるほど!」と課題解決の過程や体験、感動経験を振り返り、学んだことや自分の変容を自覚することで、自分にとって価値あるものとして獲得され、次の学びにつなげることができるのではないだろうか。

そこでの教師の役割は、子ども自らが「学習材」「他者」「自分自身」とつながり、かかわり、感動経験を重ね、心を動かしながら学ぶことができるようにすることである。学びの過程において音楽的な「見方・考え方」を働かせ、他者と協働できる場を意図的に授業に組み込んだり、子どもと音や音楽との接点を多面的につくったりすることが私たちには求められる。

しかし、音楽の本質を見詰めて追究する「そうぞう」の過程や、目指す音楽は十人十色であり、子ども一人一人の個性を生かしたものでなくてはならない。それぞれをしっかりと認めながら見詰めていく教師の力が大切である。子どもたちだけの協働にならないよう、教師とのかかわりも子どもが主体的にそうぞうすることにつながる重要なものであるだろう。

(2) 子どもの学びをつなぐ指導の手立て (学習材・他者・自分自身)

ア 学習材とつなぐ手立て (主に「見方・考え方」との関連)

1年次は、夢中になれる音楽や学習課題との出合わせ方、題材へのアプローチの仕方を工夫することで、子どもの課題意識を醸成することに大きく関与することができた。学習材との魅力ある出会い方が、子どもの音楽とつながる意欲を喚起し、持続させたといえる。さらに、新しい出会いや未経験の取り組みなどにおいても、子ども一人一人の内に培われた“音の記憶”を手掛かりに、音楽的な「見方・考え方」を生かしながら、楽曲の持つ面白さや価値に気付いたり主体的に音楽と深くかかわったりしようとする子どもの姿が見られるようになってきた。

子どもが音楽的な「見方・考え方」を生かし、働かせることができる授業を展開するには、こうした「出会い」の場の工夫が必要である。しかし、それだけではなく、多様な発想を引き出すことやそれを価値付けることができるように、子どもの見取りを生かした、教師による思考の揺さぶりが大切であることが分かってきた。そのためには、学習のねらいを達成している資質・能力が育成された子どもの姿を具体的に想定しておくことが必要である。そして、目の前にいる子どもの実態を多様な面から捉えた上で、毎時間の授業で変容する子どもの姿を見取ることができるような視点を持っておかなければならない。そうすることで、子どもたちは出会いで醸成された課題意識を持ち続けながら、個々の“音の記憶”と向き合い、音楽的な「見

方・考え方」を働かせて主体的に学習活動を展開し、課題解決に向けての学びを深めることができる考える。

イ 他者をつなぐ手立て（主によりよい「対話」の在り方・方法）

「出会い」の場面で、子どもが学習材とつながって、より深く自分の表現に向き合うことができるようになってくると、自分の心の中にある思いや音楽を使って仲間とつながっていかうとする。音楽を奏でて人と心でつながることが、大切な音楽コミュニケーションである。この音楽的「対話」が成立することが、生きた音楽が生まれる重要な鍵である。音楽の力で仲間とつながり、仲間の音を感じながら表現することによって、他者につながるすばらしさが“音の記憶”として蓄積される。また、音楽を聴く活動は、音の世界の広がりをお互いに委ねられることが多いが、音楽から受ける印象や感動を互いに認め合ったり、聴き合ったりする場を保障することでコミュニケーションは深まっていく。つまり、それぞれの表現活動や鑑賞活動の場で違いの差異に気づき、様々な思いや表現を共有したり認め合ったりすることが大切になるのである。

また、多様な人々とのかかわりを必要とする場面を意図的に創り出すことも重要である。音楽科では、授業の始めに「今月の歌」や「リズム遊び」などの常時活動を行っている。短時間の積み重ねであるこの活動は、音楽の基礎的・基本的な知識や技能を習得できる小、中学校での9年間を見通した系統性のある継続的な活動であるが、「他者」とのつながりという視点を意識した活動も取り入れている。音楽活動の始まりを他者とのかかわり合いで進めることで、コミュニケーションが苦手がかかわりが希薄だった子どもが、その後の本活動でも、自然に互いの思いや考えを認め合いながら対話し、音楽を創造することに喜びや手応えを感じている姿が徐々に見られるようになってきている。

ウ 自分自身をつなぐ手立て（主に自覚のための自己評価の方法、過去・現在・未来）

「振り返り」の場面では互いの表現のよさを認め合い、考えを共有・交換できる場を設定することにより、互いの価値を尊重したり自分たちなりに価値付けたことを見詰め直したりしながら、よりよい音楽を求めて主体的に活動するきっかけを生むことができる。音楽活動に終着点はない。一つの題材を終えて充実感を味わっている子どもが、学んだことを生かしてもっと自分の力を発揮したいという思いを持てるように、学びの本質に迫る振り返りの視点を明確にしながら記述させたり、新たな音楽と出合わせたりする。そこで、自らの成長を自覚したり、自分の中にある音楽を見詰めたりすることができるようにすることで、学びの過程を見詰め直しながら、育まれた資質・能力を自覚し、学んできたことの価値に気づくことができるだろう。すると子どもは、もっと生かしたい、発揮したいと思うようになり、学びの空間の広がりを感じられるようになってくる。過去から現在まで続いてきたことはさらに未来へとつながり、“音の記憶”を広げ、深めながら、より豊かな音楽を求めて「深い学び」を実現する過程を積み重ねていくのである。

(3) 「子どもと創る『深い学び』」における評価

ア 評価の視点

授業において楽しさや感動の場を創造しながら、子どもの様態やつぶやき、歌声や発表などから子どもの学びや育ちを評価し、指導の改善につなげる。「深い学び」に達している姿が表れているかという視点を持ち評価していく。それは子ども一人一人がこれからの学びに自信を持ち、「生かし、発揮しよう」とする意欲を高められるものでなくてはならない。そのためにも、授業を展開する中で、常に子どもの思いを大切にしながら、心の動きや表情の変化、表現の変容を評価の視点に基づいて見取る必要がある。仲間と共有・共鳴した感動経験や共に音楽を創り上げていく喜びや達成感が「深い学び」の実現につながるように、個々の評価を全体で

共有したり相互評価できる場を設定したりすることで、自己評価はより確かなものになり、音楽を主体的に「そうぞう」すること、更には対話的で深い学びにつながっていくと考える。

次に、子どもの「出会い」「追究」「振り返り」の学習過程における子どもの見取り（評価）を「深い学び」につながっていく子どもの姿を具体的に想定しながら、【知識・技能】【思考・判断・表現】【主体的に学習に取り組む態度】の三つの視点で、次のようにまとめてみる。

	「深い学び」につながっていく子どもの姿	評価の視点
出 合 い	<ul style="list-style-type: none"> 新しい題材や教材に興味・関心を持ってかかわり夢中になって音楽に没頭しながら、全身で音楽を感じようとしている。 自ら学習課題を設定し、見通しを持って前向きに課題解決しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 音楽に実感を伴いながら理解を深め、活動への見通しを持つことができているか。 【知・技】【主】 ○ 音楽との一体感を味わいながら、どのように音楽で表現するかについて思いや考えを持っているか。 【思・判・表】【主】
追 究	<ul style="list-style-type: none"> 仲間との音楽を楽しみ共有・共鳴したりしながら共に音楽を創り上げていく喜びや達成感を味わっている。 音楽の力で仲間とつながり、仲間とのハーモニーを感得しながら、互いの音楽への思いや表現のよさを認めたり、多様な見方・考え方に気付いたりしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 多様な考えや表現から、新たな感動や気付きを実感したり、自分の音楽に生かそうとしたりしているか。 【知・技】【思・判・表】 ○ 知性と感性の両方を働かせて音楽を捉え、価値やよさなどを見いだしているか。 【思・判・表】【主】
振 り 返 り	<ul style="list-style-type: none"> 自らの成長を実感しながら、学びの過程を見詰め直したり、より深く広がりのある音楽の本質に気付いたりできている。 これまでの音楽経験や“音の記憶”を基に、自分の表現を高めながら、より豊かな音楽を求めてそうぞうしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 豊かな感性を膨らませて生活などとの関連から音楽を捉えたり、新たな音楽との出会いへの期待感を高めたりしているか。 【思・判・表】【主】

イ 評価の具体的な手立て

音楽科では、題材を通して自己評価カードを取り入れた毎時間の振り返りを行っている。「何ができるようになったのか」「学び方はどうだったか」といった振り返りの視点を絞り、自分自身で学びを見詰められる振り返りにつなげていく。そして、子どもの自己評価の内容から子どもの思いをより深く読み取り、より有効な音楽の活動形態や内容、知識や技能の習得に関する要素や要因を具体的に探っていくことで次時以降の題材構想や授業構成を吟味していきたい。また様々な手立てを講じることで、それが子どもの姿にどのように表れるか具体的に示し、授業中の様態や発言などから見取っていく。そして、評価と実践（PDCA）を繰り返しながら、どのような目標設定や場の設定で「深い学び」を実現する過程を積み重ねていくことができるか、教科等横断的な題材構成とも関連させながら、研究実践を進めていきたいと考えている。

（松井 見磨）